

心や文化と経済の関係を行動経済学で研究

— おおがき まさお

経済学部 教授

さまざまな価値観・倫理観などの世界観の経済行動を研究し、個人・企業などの集団・公共セクターはどう行動すべきかを探究

経済学は希少な資源がどのように

人々に分配されているか、また、されるべきか、を探究する学問である。伝統的経済学では、自分の満足度(効用)

を制約のもとで利己的に最大化するという意味での合理性を持つ経済人を大前提として、探究を進めてきた。これ

に対し、近年急速に発展している行動経済学は、経済人の大前提を置かず、人間の経済行動について心理学、社会学、文化人類学、脳科学など他の分野

の知見や研究方法を取り入れている。大垣ゼミでは特に、「人や集団が世界

をどのように見ているか」という世界観が経済行動に与える影響の研究を中心に、行動経済学の研究を進めている。

例えば利己的経済人にとっては自分の消費や余暇からの効用が最高の価値であり、実際にそのような世界観の人も存在すると考えられる。しかし、現実

には、家族、地域や国や国際社会などさまざまな共同体に貢献することを最高の価値とする世界観を持って、寄付やボランティアという経済行動を行

っている人たちも存在しよう。

大垣ゼミの3年生研究グループは、自分たちで、どのような世界観がどのような経済行動に影響を与えているかを調べることを目的として設定し、目的にあわせてアンケートを作成して調査を実施し、得られたデータを統計学的に分析している。研究成果を三田祭

で発表するほか、行動経済学会の2012年の大会から始まったポスターセッションでの発表を申し込むことになっており、これまで毎年、審査に合格して全グループが学会発表を行っている。4年生は個人で、必ずしも世界観とは関係しない行動経済学の卒業研究を行っている。

私は慶應義塾大学に着任して2010年4月に1期生とゼミを始めたとき、学会で発表できるほどの高度で独創性の高い学術研究を3年生ができるとは全く予想していなかった。毎年、ゼミ生たちの研究と討論に、自分の研究も大きな影響を受けている。

大垣ゼミには、人の心の変化で行動も変化するという点に興味を持った塾生が集まっています。各々が関心のある世界観と経済行動を定めて論文を仕上げるため、他の誰かの研究をなぞるのではなく、まだ誰も行っていないテーマを扱えるのが行動経済学の最大の魅力です。

世界観を切り口に討論をするためか、しっかりと「自分」を持った個性の強い面々が必然的に揃っており、お互いを尊重し合える関係の中で、遊びも勉強も充実したゼミ生活を送れています。一人ひとりに自由に考える機会があるからこそ、自分たちの力で新しいことに挑戦していける7年目のゼミです。

大垣ゼミには、人の心の変化で行動も変化するという点に興味を持った塾生が集まっています。各々が関心のある世界観と経済行動を定めて論文を仕上げるため、他の誰かの研究をなぞるのではなく、まだ誰も行っていないテーマを扱えるのが行動経済学の最大の魅力です。

世界観を切り口に討論をするためか、しっかりと「自分」を持った個性の強い面々が必然的に揃っており、お互いを尊重し合える関係の中で、遊びも勉強も充実したゼミ生活を送れています。一人ひとりに自由に考える機会があるからこそ、自分たちの力で新しいことに挑戦していける7年目のゼミです。

大垣ゼミには、人の心の変化で行動も変化するという点に興味を持った塾生が集まっています。各々が関心のある世界観と経済行動を定めて論文を仕上げるため、他の誰かの研究をなぞるのではなく、まだ誰も行っていないテーマを扱えるのが行動経済学の最大の魅力です。

世界観を切り口に討論をするためか、しっかりと「自分」を持った個性の強い面々が必然的に揃っており、お互いを尊重し合える関係の中で、遊びも勉強も充実したゼミ生活を送れています。一人ひとりに自由に考える機会があるからこそ、自分たちの力で新しいことに挑戦していける7年目のゼミです。

大垣ゼミには、人の心の変化で行動も変化するという点に興味を持った塾生が集まっています。各々が関心のある世界観と経済行動を定めて論文を仕上げるため、他の誰かの研究をなぞるのではなく、まだ誰も行っていないテーマを扱えるのが行動経済学の最大の魅力です。

世界観を切り口に討論をするためか、しっかりと「自分」を持った個性の強い面々が必然的に揃っており、お互いを尊重し合える関係の中で、遊びも勉強も充実したゼミ生活を送れています。一人ひとりに自由に考える機会があるからこそ、自分たちの力で新しいことに挑戦していける7年目のゼミです。

人の世界観を尊重する

おおい ゆうき 青井優樹君 経済学部4年

大垣ゼミには、人の心の変化で行動も変化するという点に興味を持った塾生が集まっています。各々が関心のある世界観と経済行動を定めて論文を仕上げるため、他の誰かの研究をなぞるのではなく、まだ誰も行っていないテーマを扱えるのが行動経済学の最大の魅力です。

世界観を切り口に討論をするためか、しっかりと「自分」を持った個性の強い面々が必然的に揃っており、お互いを尊重し合える関係の中で、遊びも勉強も充実したゼミ生活を送れています。一人ひとりに自由に考える機会があるからこそ、自分たちの力で新しいことに挑戦していける7年目のゼミです。



脳・身体の理を知り、これを育む

私が本研究室の基本的なスタンスです。考え、試行錯誤を繰り返しながら、徐々に科学のコトバに昇華させていく、これが本研究室の基本的なスタンスです。

SFC牛山潤一研究室は2014年4月に発足。10~15名の学生と共に、熱く、厳しく、楽しく、「身体運動の神経科学」を追究しています。

牛山潤一

環境情報学部 准教授

私たちの脳と身体は、神経信号という名の情報をやりとりしながら、強弱しなやかな運動を実現しています。運動による外部環境とのインタラクシオンは、豊かな感覚を生み出し、思考や情動、記憶や学習のきっかけともなります。身体運動を起点とした「人間の「環境情報学」……これが我々の追究する「身体運動の神経科学」です。

研究室の規模はSFCにしてはコンパクトですが、体育会でスポーツと日々向き合っている学生、もともと医学部志望で医学系研究への夢を諦めきれない学生、単純に私の講義が好きで入ってきたモノ好きな学生など……学生の気質は実にバラエティに富んでいます。脳波や筋電図といった生体信号計測が主な研究方法ですが、方法論からテーマの着想はしません。学生たちの自由な「素人発想」を尊重し、これをいかに「玄人実行」するか……共に考え、試行錯誤を繰り返しながら、徐々に科学のコトバに昇華させていく、これが本研究室の基本的なスタンスです。

学生との関わりについて考えるとき、私はしばしば体育会剣道部ですごした学生時代を思い出します。とくに福本修二師範（元総合政策学部教授）との稽古は刺激的でした。「さあ来い！」という声、そんなもんか!?」そんなメッセージが剣先からビシビシ伝わってきます（本当にそう仰っていたかもしれないませんが）。押し寄せる恐怖や迷いを断ち切って、会心・無心の一本を打ち込めたとき、明日への大きなヒントを得た気がしたものです。

あの日の道場の空気感を、今は研究室のなかに作りたいたいと思っています。学生たちが主体的に実験・解析に取り組み、議論を繰り返した先にどんな未来があるか？どんな思いもよらないアイデアやアイデアで、学生たちから反響を受けるのか？毎日楽しみで仕方ありません。学生たちと共に研究を「求道」しながら、共に成長し、未来の医療やアスリート支援につながる成果を生み出していきたいと思っています。

体育会系研究室で学ぶ

原 基君 環境情報学部4年

私は「この研究室では皆、充実した研究をしているのだな」とよく感じます。なぜなら、手堅い研究から「本当にこの分野？」と思ってしまうような研究まで、自分のやりたい研究を自分から発信し、意見あえるという素晴らしい環境が整っているからです。どれも興味深いため、話し合いの場で意見や質問が止まらなくなり、気がつくと長時間経っていることもしばしばです。何本もの論文を読み、データをとり、自分の頭と手を使ったうえで、研究に真摯に向き合っていく、このような研究室の根底に存在する姿勢こそが「体育会系研究室」と呼ばれる所以だと私は思っています。

